

*Preschool in Three Cultures Revisited: China, Japan, and the United States*  
by Tobin, Joseph, Hsueh, Yeh, and Karasawa, Mayumi. 2009.  
The University of Chicago Press.

福島 美枝子  
FUKUSHIMA Mieko

はじめに

*Preschool in Three Cultures Revisited: China, Japan, and the United States* (以下、「本書」又は「本研究」)は、1989年出版の同題の研究(以下、「第1次調査」)の続編である。1989年当時と同様に中国、日本、米国の3か国の就学前教育をテーマにし、出版年で言えば20年間の変化と連続性を扱う、横断的且つ縦断的な調査研究(以下、「第2次調査」)の成果が記されている。第1章で研究の目的と方法が論じられ、次に続く3つの章でほぼ同量の頁を用いてそれぞれの国について報告と考察が行なわれ、第5章で全体的な論述と結論が提示されている。

本書の著者(以下、「著者」)が指摘しているように、就学前の子ども達のための教育機関は、その制度にも名称にも国による違いがある。そこで提供される教育を表す一般的用語として著者は“preschool education”と“early childhood education”を用い、研究対象の中心を4歳児のクラスに置いている。本書評ではそれらの訳語として「就学前教育」及び「幼児教育」を使用し、これに携る教育機関を「園」と呼ぶことにする。以下、本研究の目標と方法、及び結論の吟味から始め、次に3国に関する著者の考察を概観し、最後に本書の成果が日本の教育分野に対して示唆するいくつかの事柄について述べてみたい。本書からの引用部は、この書評のために該当部分を日本語に訳したものである。

## 1. 研究の目標・方法・結論

本研究を理解し評価する上で重要なのは、第1次調査時と同様、研究のベースに民族誌的方法(ethnography)への志向があり、次の言明に示されるように、このことが研究の目標にも繋がっているという点である。「この新しい研究が目指すのは、最初の研究と同様に、一つの国家の内部において幼児教育の文化的次元を解明することである。」(9頁)一般的に良く知られている文化人類学の方法では、研究者が現地へ赴き、そこで暮らし、人々の行動の観察やインフォーマントとのやり取りによってその地の言語や文化を解明し記述していく。著者も述べているように、一つの村や地域が当該の文化を典型的に示しているかどうかを問うためには、同じ文化圏の他の地域での調査結果との比較が必要になる。

民族誌的方法によって特定の国の就学前教育の文化的特質を引き出すことが可能であるなら、一体何校の園を訪れなければならないのだろうか。実際に著者が研究対象にしたのは、第1次調査では各国1園、第2次調査ではこれに1園を加え、各国2園である。これだけを見れば、研究結果の一般化が困難な事例研究と見做すこともできるが、著者が向かうのは3国における就学前教育に内在する文化の特質であり、これに関わる社会的要因である。この壮大なスケールの研究課題を目指してどのようなアプローチを試みたのだろうか。

## (1) 調査及び考察の方法

著者は本研究の方法を“video cued multivocal diachronic ethnography” (21 頁)と呼んでいる。まず、3 国の 2 つの園で一日の子ども達の生活がビデオに収録され、これが各々20 分間のビデオに編集された。編集ビデオに収録されている場面や内容として、園での日課、親から離れること、喧嘩、間違っただけの行い、異年齢の子ども達の遊び、先生と子ども達の親しさが挙げられている。ビデオに収録されたのは、そこに登場する子ども達と教師の行動 (behavior) であり、それが発生している物理的空間である。上記の語句に示されるように、このビデオは、著者にとって文化の語り手 (インフォーマント) である人々とのインタビューの手掛かりとして使われるものであり、著者の主眼は、そこに発生している光景についての人々の「声」、すなわち、当事者がどのように説明するか、又は正当化するか、当事者でない人達はどうかという点にあった。何故なら、著者にとって教育実践とは実行 (action) と意図 (intention) で成り立つものであり、人々の説明や正当化や感想から行動の背後にある考え方、信条、価値観を照らし出すことに目的があったからである。著者は独自の概念を用いて、「教育学部で明示的に教えられているわけでも教科書に書かれているわけでもないが、暗黙の文化的論理 (implicit cultural logic) を反映している実践」に着目すると述べている。(19 頁) この場合当事者というのは、録画されたクラスの担当教師であり、さらに当該園の園長や他の教師にもインタビューが行なわれた。著者が本書で述べているように、教師自身は自らの思いや考えが文化的なものであるということを必ずしも意識していない。著者によれば、殊に米国の参加者には個人の考えに基づいて編み出した実践であるという意識が強いいため、米国に関する第4章が彼らのために「通常は当たり前と思われている信条や実践が文化的、歴史的に構造化されたものであるという認識を生み出すこと」(159 頁) を切望すると述べている。

当該の園の外部でインタビューに参加した人々を著者は3つのレベルに分けて説明している。第一に、当該国の他の諸都市の教師と園長である。これは、研究の対象となった園がそれぞれの国を代表する園だとは考えられないため、それぞれの国の中に存在する多様性を探るために採られた方法である。第二に、他の2国の教師と園長と幼児教育の研究者が参加した。教師が互いに他国の教室で起こっていることについて意見を述べれば、直接会うことがなくても、相容れない価値観、主観と主観が拮抗する場も発生することになるが、本書には、そうした文脈において著者が第三者として当該の国・社会・文化に即しての理解を提示し、結果それが自発的な調停となっていると考えられる個所も見られる。第三に、著者の同僚及び調査結果の解釈を手助けしてくれた幼児教育専門の研究者が参加した。

第2章から第4章までで行われている各国の資料の分析は、類似の手順で行われている。まず、第1次調査の対象園への再訪の際に行われた元園長とのやりとりから得られた特筆事項から、第2次調査時にビデオに収められた同園の一日の記述へ、さらに、同園はどのように変化したか、または変化しなかったか、それはなぜなのかについての論考へと進む。次に、新しく加わった園の一日の紹介から、そのビデオを視聴した人々 (教師、園長、園外の教師や研究者) のコメントや感想に基づいて2園の比較へ進み、さらに、教育実践に直接、間接に影響している社会的な要因が考察されている。調査によって得られた人々の「声」だけではなく、全編を通して先行の諸研究も多く考察の資料として用いられている。本書における著者の議論の展開方法は、研究の対象者からデータ収集の手順と分析方法の説明へ、さらに分析結果とその議論へと直線的に進んで行く研究報告書の類と比べると、込み入ったものであり、緻密な描写や論述が特徴的である。

以上、本研究の方法と目標を吟味し、調査と考察の具体的な相も観察した。ここで、本研究の方法について二つの面での曖昧さを指摘しておきたい。第一は、本研究での人々の「声」の収集過程に関わるものである、先に見たように、著者はインタビューの対象者を分類して説明し、インサイダーとアウトサイダーの両方から「声」を集めたことを明らかにしている。また、対象園の所在地以外の都市名などが言及さ

れている部分やインタビューで使われた質問が明記されている箇所が見られる。しかしながら、それぞれの面談がいつ行われたのか、果たして総勢何人の人が参加したのか、どの人も第1次調査の3編も加えた計9編のビデオを観たのかどうか。こうしたことを読者ははっきりと掴むことができない。本研究に貢献した人達の名を明記した「序」の部分の参考になれば、日本の場合は2園合わせて園長も含む7人の教師と6人の研究者の名が挙がっているが、他の諸都市で行われた面談の手順は伝わって来ない。実施手順がもっと明確に記述されれば、読者にとっての透明性と説得力が増すのではないだろうか。本書には、対象園でのビデオ撮影がすべて2002年に行われたとしている箇所と、一部2001年や2003年となっている箇所があるため、実施年が正確に伝わって来ないが、いずれにしても、本書出版までの間に各国の諸地域や諸園でのインタビュー、資料分析、そして執筆に、多大な労力が費やされたことが想像できる。

第二の曖昧さは、対象園で目にしたことと人々が語ったことを基に、どのように文化的特質を引き出したのかという点にある。中国の園において愛国主義的考えに基づく実践的特徴が見られること、日本の園の教師には子どものいたずらや争いに必ずしも直ちに介入しない面があること、米国の園では自分がなぜ或る活動をしたのかをあくまでも言葉で表現させようとする等がその例であるが、これらは必ずしも著者によって初めて独自に明らかにされた文化的特徴ではないとすれば、それらを示唆する既存の研究～本書に先行する第1次調査を含む～に筆者は精通しており、その知識を資料の分析や解釈に生かした面があるだろう。各国の社会的状況に関する描写や論述においても同様である。また、インサイダーには当たり前前の行動を不思議なものと感じるアウトサイダーの目も文化的特質を引き出すのに生かされたはずである。第2次調査の著者3人はそれぞれの対象国の出身である。この国際チームの内部でもインサイダーとアウトサイダーの目や知識を生かすことができたはずである。さらに、他国の教育実践をビデオで見てアウトサイダーが持つ感想はあくまでも主観的なものになる可能性もあるため、対象に即して理解する著者の姿勢やその理解の深さが生きてくることになる。これらが複合的に著者の解釈や理解に作用したものであると思われるが、そのプロセスは本書において必ずしも明確に詳述されているわけではない。手で織り上げられた絨毯や織物を見て、それが作られた過程に思いを馳せるようなものである。

## (2) 結論

第1次調査の結論は、本書の中にある次の言に示されている。

「日本、中国、米国の就学前教育の機関は、それぞれの文化の中核的信条を反映し、且つこれを伝える社会的機関である。」(1頁)

第1次調査に引き続き第2次調査の対象となったのは、中国では昆明の公立の園、日本では京都の仏教系の私立の園、米国ではホノルルの中流階級の人々が利用する聖公会系の私立の園である。このことから、文化的な特質が表れやすい園が選ばれたと考えることができるのではないと思われるが、第2次調査では国内での多様性への関心から、それぞれの国において「それ自身も他者からも幼児教育の新しい方向を代表すると思われるプログラム」(8頁)を持つ園が1園加えられた。中国では最近の幼児教育改革において大きな役割を果たした上海市に位置する公立の園、日本では東京で「のびのび教育」を行なっている無宗派の私立の園、米国では就学前教育拡大の政策を反映して、フェニックス市にあり家族の貧困とか英語以外の話者であるとか特別支援が必要であるとかの問題を持つ子ども達のための公立の園が選ばれた。対象園について著者は、「それぞれの地域で良い評判があり、稀有なカリキュラムや教授法で知られていない園」、すなわち、「普通の教育実践の範囲内にある」(8頁)と考えられる園を選んだと述べている。著者も言及しているように、各国で取り上げられた2園がその国の就学前教育を代表するものであるとは考え難いが、2園についての観察、記述、論考により、民族誌的方法でなければ得ることのできない形で文化

的次元の内実が照らし出されたと言えるだろう。各国の内部での多様性を観察するために、ビデオ収録された教室での実践の特徴に関して国内のアウトサイダーから具体的な賛成意見や反対意見を得、それらを本書の論考に織り込むという方法も採られている。

第2次調査では、国内部の多様性への関心と共に、歴史的視点が加わり、必然的に社会的、時代的な諸要因が扱われることになった。具体的には、国のカリキュラムや施策の変化と社会的状況の取り込みである。社会的状況として着目されたのは、中国の世界的経済への参入、日本の少子化と経済不況、米国のブッシュ政権下での教育施策や脳科学の発達及び子どもの発達にふさわしい教育実践という観念である。文化的であり、且つ社会的な研究であると言うことができるが、「教育に関する国際的な研究の殆どが社会的、政治的な影響力を前景に置いている」中で、著者の主眼はあくまでも「文化」にある。研究の結論の抽出において最後の課題となるのは、就学前教育においてグローバル化が見られるのかどうか、すなわち、「最も理にかなない効果的である教育実践方法が浸透し、それが、合理性や機能性以外の理由で良いものと信じられている、伝統に繋がる各地域の実践方法に取って代わった」(231頁)のかどうかである。著者の見解は、「文化は、連続性の源として働き、グローバル化、合理化、経済的変化の影響に対してブレーキをかけることになる」(224頁)というものであり、3国の比較により次の結論を提示している。

「我々の結論として、中国、日本、米国の幼児教育へのアプローチは、現代化とグローバル化に拘わらず、中核的な実践や信条において一世代前より類似してきたというようなことはない。あるいは、むしろこう言うべきであろう。時間の経過に伴って似てきた面もあれば、より大きな違いを見せた面もある。我々の研究は、文化に固有の実践の中には外来の実践に取り替えられたものもあれば、世界的に広まっている考え方との出会いに影響されず生じたものや、ハイブリッドの形に変化してきたものがあり、この過程で文化に固有の実践が新たに生み出されたことを示している。」

(232頁)

ここには、各々の国が固有の変化のプロセスを辿るという史観が表明されている。著者は、同一の現代化とかグローバル化という時間軸の中でどちらかが先に進み、どちらかが遅れている、という考えには立たない。また、時間軸において過去より良くなったとか悪くなったというような価値判断も下さない。これは、変化のプロセスが文脈に依存することに注視する考え方であり、著者はそれを国内部の各々の地域や諸園の比較にも適用している。著者が挙げている例で言えば、対象になった中国の上海の園は昆明の園の将来の姿ではなく、逆に昆明の園は上海の園の過去を表わすものでもない。

## 2. 中国・日本・米国の調査結果

著者は、各国の変化の概略を次のように指摘している。第一次調査時に、中国では統御や統制、アメリカでは遊びと自由な選択が強調されていたが、20年後、中国では子どもの自主性や創造性へと教育目標が移行し、一方、アメリカでは子どもの勉強面での成果や授業での教師の役割を重視する方向に変わった。著者によれば、3国の中で中国の変化が最も大きく、次に米国、最も変化が少なかったのは日本であった。日本は外来のものに影響されることも諸外国に影響を与えることも殆どなかったと指摘している。日本の就学前教育の機関は、この20年間に日本が経験した「社会変化という海の中であって文化が継続される島々」(242頁)のようであるが、それは単純に静止状態を意味するのではなく、「連続性という言葉が示唆する以上の変化への活力と不安が存在している」(224頁)とも述べている。

以下、著者が観察した各国の変化と連続性について、教室での実践を中心にして著者の要点をまとめてみたい。本書では、校舎や教室や厨房や通園バスといった環境の変化の記述や論述も行われ、社会的な状況に関してはここに挙げる以上の議論が展開されていることを付言しておきたい。

## (1) 中国

中国に関する著者の主な着眼点は、2001年の幼稚園教育要領に明示された国家主導の教育改革の効果が教育実践の中に表れ、同時に伝統的な価値観も生きているという点である。幼児教育のパラダイムの変化として、「子どもの権利」を重視する国家の啓蒙活動と共に、教師主導から子ども主導への変化、個々の子どもに合う教え方という観念、アクティブラーニングや遊び、創造性や想像力の育成が重視されるようになったとある。こうした変化が表れている実践例として著者が挙げているものの中に、昆明の園の”block play”（積木・ブロック遊び）と上海の園の”the Story Telling King”（個々の子どもが物語を語り、他の子ども達からフィードバックと評価を受けるもの）がある。前者に関しては、第一次調査時にはIQテスト用のものを知能発達のために教師主導で教えていたが、第2次調査では大きなブロックで子ども達に好きなものを作らせる方法に変化していた。後者は上海の園の実践面での先駆性を示すものの一つであり、幼児が教師とのやり取りを通して行うことができるようになった活動だそうだ。しかしながら、教師へのインタビューから、こうした実践上の変化の中に文化的な考えや信条も生きていることを著者は見出した。”the Story Telling King”を例にとると、各々の子どもに自分のパフォーマンスに対して他の子ども達から評価を受けさせる点である。これは、「建設的な批判」という教師の文化的な考えに支えられており、著者が面談をした日本と米国の教師達からは問題視されたとある。他の文化的な信条として、軍人や警官への敬愛を示すものとして銃遊びが許容されていることや、グループでの柔軟体操のような集団活動に価値を置く考え方が挙げられている。

著者によれば、中国の幼児教育におけるパラダイムの変化は、社会全体の変革の一環として外来の考え方を取り入れて行われてきた明示的な施策であり、世界経済において成功するために、「有望で教養があると同時に、より創造的で、危険を覚悟することができ、適応性に富む新しい市民」（225頁）を育てることを目指すものである。しかしながら、中国に関する著者の見解は、ここに止まらない。なぜなら、教育者の間に儒教や社会主義的価値観や伝統的な教育観が再び戻り、それらに基づいて中国人らしさも育てたいとの思いや決意があることを観察したからである。そこで著者は、新しいパラダイムと伝統的な価値観の融合やハイブリッド形への志向を現状把握として提示している。その「勇敢な社会的実験」がどうなっていくのかは予測不可能だとし、この問いへの答えを「2025年頃に*Preschool in Three Cultures*の新たな追跡調査を行なう時に発見できることを楽しみにする！」（228頁）と述べている。著者はさらにデューイが中国に影響を与えた時代にまで遡り、現代に至るまで外向きと内向きの動きが交互に登場してきたという興味深い歴史的見解も提示している。

## (2) 日本

著者が日本で対象にしたのは、京都の私立保育園と東京の私立幼稚園である。著者は、それらが「園長と数人の非常に経験を積んだ教員が新任教員への指導助言に大変大きな役割を果たしつつ、一つの特徴的で特異でさえある教育方法を確立し、教員の高い離職率にも拘わらず一世代の間教育実践の連続性を維持している私立のプログラムである」（145頁）との認識を示している。東京の幼稚園の方は、子どもが隠れて遊べるアジトも作られている。

著者は、2園の比較によって2園の類似性を三点引き出した。第一の類似点は、米国と中国の対象園に比べて、前もって形が決められていない遊びに多くの時間が費やされるという観察である。著者は、それが「日本の自由型の幼稚園と保育園に特有のものである」（127 - 128頁）と述べている。私見では、公立の幼稚園に行けば、教案によって形を明確にした実践がもっと多く行われているのではないだろうか。第一の類似性と関連して著者が着目している事柄の一つとして、米国と異なり、「就学後の勉強の準備を強調

する政府によって圧力が与えられているという兆候は見られない。」(131頁)ここで著者は、日本の2園が知的発達を促す活動をさせていないと言っているのではなく、高度な知的活動が必要な例として、5歳の男児が年下の男児におしこの仕方を教えている場面に読者の注意を喚起し、年下の子どもが分かることと分からないことを理解しながら教えるという高度な能力が必要であると述べている。

第二の類似性は、子ども達のもめごとの扱い方である。著者は第2次調査において、子ども同士のいたずらや喧嘩に教師がすぐに介入する場合と、直ちに介入しない場合があることを目撃した。そして教師及び保育士へのインタビューから次の見解を導き出した。「干渉しないことは、喧嘩に対応するために日本人の教師が用いることのできる選択肢の一つである。」これと対照的に米国では、「体を使う子どもの争いには(教師が)介入するのがルールである。」(132頁)一方、日本の教師は「見守る」姿勢を持っており、「彼らは、(様子を見守り、介入すべきかどうかについて方略上の決断をするために、自己コントロールと賢さが備わっていなければならない。」(134頁)著者のこの見解は、日本人教師が喧嘩に介入しないことをその教師の無頓着さとか注意力の無さと捉える他国の教師の観方を是正することになるが、著者によれば、日本国内の教師からも様々な批判が出た。私ならこの状況ではもっと早く介入する、子ども達がこの争いを解決する方略を見つけれられるように教師は問いを与えるべきだ、これは日本社会の一つの欠点を示すものである、いじめに発展する可能性がある、といった批判である。(109 - 110頁)

第三の類似点は、「さびしい」という言葉が子ども達に対して使われたいくつかの場面の観察に基づいている。折り紙の魚に目が描かれていないのはさびしいとか、食べ残されたニンジンさんがさびしがっている等である。ここから著者は、「幼い子ども達に、感情を直覚で知りそれに対応することを教える」(138頁)ことが重視されているとの解釈を提示している。これは、幼い子どもに言葉によって自分の感情や考えを表現することを促す米国や、物語の話術による自己表現や他の子どもにフィードバックを与えることを求める中国との違いである。ビデオに映った米国と中国の教育実践と子ども達の様子に驚き、これをきっかけにして日本について省察をした二人の日本人教師の言葉が引用されていて興味深い。(138 - 139頁)

これらの他にも、著者によって日本の文化的特徴として発見されたものがある。一つは、京都の園で元園長の時代から実施されている、年上の子どもが年下の子どもの世話をする活動である。前述の5歳児の男児と年下の男児の交流はその例である。また、教師又は保育士が、プールから上がってきた子どもの体を拭いたり、髪の毛を梳かしたりする点である。米国ではこのような体の接触を伴うケアを避けるべきだとする社会的状況がある。

著者によれば、20年の間に欧米で日本の幼児教育に関するいくつかの研究書が出版され、それらは日本の教育の強みを指摘すると共に、西洋では当然のことと考えられていることに対して疑問を投げかける効果もあったが、実践面ではこの20年間、日本は諸外国に対して殆ど影響を与えなかった。その理由としてまず挙げられているのは、日本の大きなクラスサイズである。これは、1クラスの人数が多くなればなるほど教育効果が薄れるという西洋の考え方に立脚すれば、受容が困難である。それにも増して重要な理由がいくつか指摘されている。

第一に、著者によれば、幼児教育を意識的に構築されたものと暗黙の信条に基づくものに分けるとすれば、日本の幼児教育は深く後者の特質をもつものであり、近年アメリカで影響を与えているイタリアのReggio Emiliaのように自らの信条を明示する特定の教育者も、参考になる図書も、他国への普及の仕組みも存在しない。これらが事実であるなら、工業製品とは異なり、日本人は教育実践を輸出する意図の無い人々だということになる。また、著者によれば、日本のカリキュラムには、集団の和、快活さ、創造性、自然鑑賞、我慢強さ、思いやりを重視する考えが強調されているが、それらの目標への到達方法は明示されていない。これが事実であるかどうかの私の検討は別の機会に行うことにしたい。

第二に、日本の幼児教育の中心的目標は日本の子ども達を日本人に育てることにある。著者によれば、思いやり、はじめ、集団の和といった価値観に相当するものは他の国々の文化にも存在するものの、日本

と同一のものではないし、日本と同じように優先されているわけでもない。日本の幼児教育が目指すものをそのまま受容することができないので、その教育方法を借用することは困難である。

第三に、著者によれば、日本の幼児教育にはアメリカやヨーロッパの殆どの地域と基本的に異なる前提がある。まず、幼児の子供らしさが大切にされ維持される。そして、幼稚園は母親に代わるものとしてではなく、伝統的な地域集団に代わるものと見られており、就学前教育を通して「社会の複雑さ」の中で育てることに主眼が置かれる。このことは、米国よりも人数の多いクラスで子ども同士のやりとりを促進しようとすることや、子どもの喧嘩は子ども達で解決させようとする教師の行動と関わっている。著者はまた、そのことが「少子化」の問題とも関わっており、園において子ども一人一人が多くの子どもと関わることで、家庭ではなかなか与えることのできない社会の複雑さを経験させることができると信じられていると指摘している。

### (3) 米国

著者は、第1次調査の対象でもあったホノルルの園について、カリキュラムと教室での実践が殆ど変化していないことを指摘した上で、この園が所属するNAEYC（全国幼児教育協会）の影響と社会的圧力に関する観察と解釈を提示している。前者の例は、子どもの「発達にふさわしい教育実践」（DAP）の観念に基づいて教室移動をしなくなったこと、「子どもの学びを目に見える形にすること」（documentation）が重要であるという考え方に即応して一人一人の子どもにスクラップブック（子どもの活動を撮影した写真とその活動について子ども自身が述べた言葉を収めたもの）を作成している教師がいること等である。社会的圧力の例は、就学後の勉強の準備への関心を持つ親に対して遊びのカリキュラムを以前より大きく正当化する必要が出てきていること等である。一方、フェニックスの園は、貧困層や労働者階級の家庭の子ども達に午前と午後のグループに分かれて就学前の教育経験を与えると同時に、一日の保育も担うという新しい公立の園の一つであり、子どもの出入りや空間移動や担当者の変化等の要因で、本研究の対象となった他の5つの園と異なり、教育実践の構造をつかむことが困難である。家庭の言語を反映して教室で英語とスペイン語の両方が使われており、特別支援教育の専門家も配されている。この園もNAEYCの会員である。著者の観察で殊に重要だと思われるのは、DAPを主眼として遊びを重要視する教師が、リーディング力の発達とこれを教える科学的方法としてのフォニックス（phonics）を中心に据えたブッシュ政権のNo Child Left Behindの圧力によって、矛盾に苛まれている姿を見たことである。著者は、NCLBは外的な脅威となる力であって国内での批判も相当あるが、一方NAEYCのDAPは教師自ら内的に習得していくことが求められているものである、と述べている。これは、政治的圧力よりも教師がいかにか自力でDAPを実践上の形にしていくかという点を重視する捉え方である。

米国は、多くの教師を巻き込み導いていく新たな用語が生み出される国であり、この点において就学前教育も例外ではないことを本書は示している。すなわち著者は、DAP等のNAEYCの中核的概念によって教師が自身の教育実践を説明した点に着目し、2園が共にこの協会の影響下にあることを指摘している。しかしながら、第1次調査時と同様に、深層の文化的信条を反映する実践が存在していることに注目している。子どもに自分で活動を選ばせること、子どもの個性を尊重すること、そして言葉での自己表現を促すことであり、これらが2園の共通性として見出されたとある。加えて著者は、いくつかの理由で子どもの肉体的な面より精神的な面に焦点が移ってきたことと、フェニックスの園に見られるように特別支援教育の専門家も就学前教育に関わっていること（例として過剰行動の子どもへの個別的支援）を指摘している。

国際的な比較という観点から、著者の観察や解釈で興味深い点を指摘しておきたい。一つは、日本との対比である。著者によれば、「自由な選択」に関して米国では子どもの「選択」に主眼があるが、日本では「自由な」遊びが重視される。米国の個性の尊重は、日本の折り紙の活動に見られるような画一的で集団

的なやり方と対照的である。また、第1次調査時と同じような言葉遣い(“Tell me.”や“Use your words.”等)を繰り返して教師は子どもの言葉による自己表現を求めていくが、日本では相手の心情を察することに価値を置いている。より多くの国々との比較において著者が論述している米国の特質の一つは、特別支援教育が必要な子ども達や低収入の家庭の子ども達に資金が使われているという点である。著者によれば、これは機会均等という観念の捉え方の違いによるものである。日本やフランスや他の多くの国々でそれはすべての子ども達に教育を提供することを意味するのに対して、米国ではそれぞれの子どもに合う質の教育を与えることを意味する。著者が挙げているもう一つの重要な相違は、米国においては政治的論争と関連して、家庭から子どもを切り離して就学前教育や保育をすることが良いことなのかどうかという議論が生き続けているという点である。著者は、第1次調査時以降に発表された研究分野での成果に言及し、就学前教育の是非よりむしろその教育の在り方に教師達の意識が向くようになっており、その面で相反する意見があることを指摘している。

### 3. 日本の教育への示唆

本書を読むのは、著者の描写、論述、引用された人々の言葉に助けられて、未知の土地を旅するようなものである。この旅は、一生直接関わることの無い海外の教師や保育士の教室での活動や考え方、そして彼らが抱えている問題や社会的状況を知らせてくれる。著者の研究方法は、サンプリングや統計分析に頼るものとは異なるため、一方では、対象となった特定の教師や園に限定して研究結果を捉える必要があると思われるが、他方では、それぞれの国の内部での多様性を扱い、国内と国際的なアウトサイダーの目を生かしつつ社会的要因も取り込んで各国の変化と連続性に迫った点において、事例研究の域を越えて就学前教育における各国の文化を論ずる地平を拓こうとしたことも事実である。それぞれの国に住む教師や研究者に大いに参考になる研究である。

日本の就学前教育について著者が述べていることを一言で言うなら、著者の言う「暗黙の文化的論理」の度合いが大きいということになる。このことは、教育に関する議論が常に日本語で行なわれ、それが日本人の間でだけ共有されていることと無縁ではないだろう。また、教育実践に関しては、諸外国に輸出しようという意志もないのではないだろうか。著者が言うように日本では国のカリキュラムさえ明示的ではないのかどうか疑問が残るが、著者はこのことを批判するのではなく、あくまでも観察者の立場を維持している。外国から見てより明示的であるカリキュラムとはどのようなものなのだろうか。本書で明示的と見做されている中国の施策やカリキュラムとの比較をすれば見えてくるかもしれない。

私がこの書を取り上げたのは、欧米やアジア出身の留学生を教える中で、「学校教育における文化差と類似性」という事柄に思い至る時があるからである。留学生が教室で見せる行動や勉強への取り組み方という点で、日本人学生よりも良く発達していると思われるものを目にすることや、留学生の内部でもグループ別の違いに気づくことがある。例として、欧米の留学生がよく見せる、自発的に発言する能力について述べると、それは、本書の米国の章にあるような、言葉による自己表現を重視する文化と繋がっているのかもしれない。日本でも小学校の教室で子ども達が盛んに意見を発表する場面を目にするところがあるが、それは、個人個人のニーズを重視する考え方と行動特徴が子ども達の中に育っていることを意味するのか、それとも、他の人々がいる中で発言する勇気を持てるかどうかといった他者志向的な行動の育成なのか、検討してみる必要があるように思われる。個を核とする文化では比較的抽象的な次元での場の共有という観念が育ちやすいかもしれないが、他者志向的な文化では自己表現が最終的な目標となりやすいかもしれない。また、日本では中等教育から高等教育へと進む中で何やら若者の寡黙さが増していくように思われる。もしこの観察が正しいなら、幼児教育に遠因があるのか、それとも、中等教育と高等教育が影響しているのか。幼児教育から高等教育までの各レベルを縦断し、教育実践の特質と子どもや若者の中に実際に

育っているものを観ていく研究の発展が望まれる。

本書は、長い間培われてきた文化的な価値観は簡単に消えてしまうものではなく、外国のものを借用しても、受け手の持つものが作用して何らかの変容が生じることを示唆している。「異文化理解」という言葉を言うことは簡単だが、私達の通常の異文化理解はそれほど深いものではなく、本書のような研究が無ければ、「どうしてこの人たちはこのように行動するのか」という問いへの十分な答えを見出すことは難しいかもしれない。

しかしながら、教師は時代や文化を越えて結びついている面もある。著者は、そのことを示唆する次のような言葉を本書の最終部に据えている。第1次調査時の昆明の園の園長が第2次調査の時に述べたものである。

「これらの映像を観ると、当然のことながら多くの物事が変化したことが判ります。しかし、私は当時の私達の教え方に誇りを感じます。(当時の) ビデオの中に見えるのは、私達が皆懸命に仕事をし、扱わなければならない物事を抱えつつ、私達にできる最善を尽くしていた姿です。当時は今は違う時代でした。当時、今のように、この園の教職員は同じ専門家としての意識と勤勉さと子ども達への関心に導かれていました。」(248頁)

ここに挙げられた専門家としての意識や勤勉さや子ども達への関心は、教師の共通性であり、この園長が述べているように同一の園や一つの国に生き続けているだけではなく、国の境を越えて存在しているものでもある。本書は主に私達の認識の次元に貢献するものであると考えられるが、あえて教育現場への応用という面にも思いを広げてみると、外国から来た教師との交流や協働の機会が一昔前より多くなった現在の日本において存在する文化差と共通性に改めて気付かされる。日本の教育分野に参入する外国育ちの人達には驚きや当惑が経験されているはずであり、逆に、彼らが日本人には良く理解できない行動を見せることもあるだろう。そのような違いに左右されない結びつきを築くためには、上記の園長の言葉にあるような教師としての共通性の認識が必要であり、それが救いともなるように思われる。

最後に、本書は、米国の協定校に学生達を連れて行った折に、現地で一番大きな書店で発見したものである。渡航前にその書店を紹介してくれたかつてのアメリカ人留学生に感謝したい。